
marchen 【Sound **H o r i z o n**より】

鈴村弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m a r c h e n n【S o u n d H o r i z o nより】

【Nコード】

N 6 0 6 9 X

【作者名】

鈴村弥生

【あらすじ】

S o u n d H o r i z o nのアルバム【m a r c h e n n】を全部小説にしてみようという無謀な企画です。他の方の解釈などは一切参考にしていないので、私の独自のアイディアによるストーリー展開となります。ご自身の解釈を壊されたくない方は、見ない方がいいと思います。

第一章 第二節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（1）（前書き）

> i 3 3 1 1 4
— 2 6 9 4
<

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング（1）

この物語は虚構である。
ただし、そのすべてが虚偽であるとは限らない。

第一章

第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング

物心ついたときには、すでに父という存在はいなかった。父というのがどのようなものなのか、それすら彼は知らない。

彼にわかっていたのは、自身の名前がメルツ・フォン・ルードヴィングであること、そして彼を守ってくれるのが優しい母親だけであることだった。

「メル」

呼ばれて、少年はゆっくりと顔を巡らせた。気をつけていないと、目の前の世界は簡単にぼんやりと輪郭を失ってしまう。

「大丈夫？ また頭が痛くなったの？」

そんな彼の小さなためらいと戸惑いを、母は正しく見抜いてくる。「いえ、大丈夫です」

首を振ってメルは改めて目を凝らし、美しい母の凛と整った面差しを明確にしようと試みた。

まず印象的なのは、長い栗色の髪だ。結わずにまっすぐ背に流し、いつも青い薔薇のついたヴェールをかぶっている。

メルは母以外の女性を知らないが、母以上に綺麗な人が果たして存在するのかなとも思う。

「母上」

お母さん（ムッティ）、と呼びそうになり、あわてて言い直す。
もう小さな子供ではないのだと、メルなりのけじめだ。

けれどそんなことは何もかもお見通しと言わんばかりの母の優しい笑みを目の当たりにしてしまうと、そんな決めごとをした自分がまた恥ずかしくなってしまう。

「まだ見ることに慣れていないのね」

母の手が、そっとメルの白い髪を撫でる。なめらかな感触は瞼の上ですべり、心地よさにメルはふっと微笑んだ。

「無理をしてはいけませんよ。少しずつ、目が見えるということを受け入れていけばいいのだから」

「はい」

ようやく焦点の安定した視界にまっすぐ母を収め、メルはうなずいた。

幼い頃のメルの世界は、優しく温かい漆黒だった。常に傍らにあり守ってくれるその温もりの名が『愛』だということを、ずっとのちになって知った。

目の見えなかったメルは、そもそも視力という概念自体理解できなかったのだ。

だからメルにとってはまだ、豹変した世界はすべて未知の光だ。

「これは……草」

伸ばした指先に、ひやりとした何かが触れメルは思わず手を引っ込める。月の光に柔らかく照らされて、人差し指の先が冷たく銀色を滑らせている。

「夜露……」

その名前を思い出し、彼はまじまじと滴を見つめた。

本で読んだ宝石というものは、このような美しい存在なのだろうか。自ら輝き、希有な魔力で人を、特に女を夢中にさせると聞く。母は一つとして身につけていないけれど、やはり宝石を飾ればもっ

と美しく、もつと素晴らしくなるのだろうか。

しかし、夢想に浸る彼の目の前で、夜の輝きはつうと指を伝い暗がりに滴り落ちてしまった。

落胆の溜息をつき、メルは立ち上がる。膝の辺りがしつとり冷たかったが、不快ではない。

月の光が、とても明るかった。

太陽が強すぎて耐えられなかった頃、銀の明かりの下でメルは様々なことを学んでいた。だから今でも、昼のまばゆさよりも静謐な夜のあえかさの方が慕わしい。

たとえば、天に負けないくらい美しい星をちりばめている夜の草原も、その一つだ。

あまり遠くへ行つてはいけない、と母にいつも注意されてはいるけれど、この光景を前にするとつい忘れてしまう。いつまでもどこまでも、清浄なきらめきを追いかけていきたいくなる。

夜露の星を辿りながら、メルはゆつくりと歩いて行った。まだ月は天の高いところにある。もう少し散歩してからでも、戻るには遅くないだろう。

メルは、そうしてなおも光を散らして歩いた。夜露に塗れた苔藻は、彼の軽い足取りですらいとも儚く宝石を失っていく。それを、惜しいと思わないわけではなかったけれど。

第一章 第二節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(2)(前書き)

> i 3 3 1 1 4
— 2 6 9 4
<

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（2）

その建物を見つけたのは、月が真円を描いた夜のことだった。

夜露を追いかけて、この夜もメルは無心に森を彷徨っていた。あまり遠くへ行き帰りが遅くなれば母に心配をかけるかわかっていないわけではなかったが、満月の銀光をいっぱい照り返す夜の森は、いつまでも目に焼き付けていたいくらい美しかったのだ。

草に隠れる木の根に足を取られないよう気をつけながら、それでもだんだん進む足は速くなる。頬を上気させ、メルは夢中で月光の中を歩いていった。

深い深い森にも、境目はある。

メルはそうしているうちに、ぽつかりと木々が途切れたことに気づいてぎくりと動きを止めた。

森から出ることを母があまり快く思っていないらしいことを、メルは知っていた。メルが少しでも外に興味を示すそぶりをすると、彼女の目に悲しみと不安が浮かぶのだ。何が母を憂いさせるのかまでは考えが及ばなかったが、母にそんな顔をさせたくなくて、メルは自分の好奇心を極力隠してきていた。

けれど、消し去れはしなかったのだ。

しばし辺りを見回したのち、メルはそろそろと再び歩き始めた。

頭上を木々が覆い隠すことのない道は、妙に広々としていて空虚とすら感じられる。

夜空というのは、こんなにも深い藍色をしていたのか。

星々というのは、こんなにも信じられないくらい数多ちりばめられているものなのか。

鼓動が早くなる。わくわくする気持ちがそれに併せてたちまち全身を駆け巡るのを覚えて、メルは思わず微笑んでいた。

もっ少しだけ。

もっ少しだけ、この先へ行ってみたい。見てみたい。

「……ごめんなさい、母上」

口の中で小さく呟いてから、少年は走り出した。

月は明るい。そして、地面は草の一本も生えることなく、硬く乾いていた。これを『道』と呼ぶのだとメルは本で知った。

本物の『道』を見るのも、実際に踏みしめるのも初めてのことだ。纏わり付いてくる草のない地面は、妙に軽く思えた。

それがさらに、メルの足取りを速くさせる。

走って走って、干上がった喉に痛みを覚えてようやく彼は立ち止まった。苦しい。全身が、空気と休息を求めている。

最も主張の激しい心臓の要求に従って、彼は道の上にしゃがみ込んだ。

考えてみれば、これだけ全力で走ったことも今までなかった。そうしようにも、森の中では危険だからだ。

疲れた。でも、気持ちがいい。

しばらくじっと休んでいると、身体中の叫びも収まってきた。

大きく息を吐き出して、彼は空を見上げる。

月が、美しかった。あまりに美しく明るすぎて、星が見えない。

ふと、帰りを待ちわびているだろう母のことを思い出した。

きつと心配している。急に、自分の咄嗟の行動が後ろめなくなつた。

もう戻ろう。そして二度と、言いつけを破つたりしないようにしなければ。

立ち上がった少年は、そのときは確かに心に決めていたのだ。

「あ……！」

足から伝わる振動。だんだん近づいてくる轟音と、何かの存在。

道の脇に身を隠したのは、ただの反射だった。

重い音は、どんどん迫ってきた。息すら殺して、目だけをのぞかせてメルはそれが通り過ぎるのを待った。

月の光が、遮られる。それが、一瞬だけメルの前をよぎっていく。音も重さも振動も、その影と一緒に転がっていく。

ぴりぴりとし、鋭い音が時折耳を貫いた。

本当にそれらが小さくなってしまうってから、メルはゆっくりと路上に戻る。

あれは、何だったのだろう。

大きな黒い箱に、四つの車輪がついていた。

ぴりぴりというのは、箱の前に乗った何かが、細くてしなるものを振り回すときの音だった。一番先頭にいたのは、四つ足の生き物だろう。息づかいすら聞こえそうだった。

本で得た知識から、メルは懸命に今日にしたものの名を探る。

「馬車……」

それを初めて知ったのは、おとぎ話の中だ。

綺麗な綺麗な王女が乗る、綺麗な綺麗な乗り物。

溜息をついて、メルは馬車の消えていった先に目を凝らす。

その夜の月は本当に、明るかった。

本当に遠くにあつた細長い塔の、黒々と影に塗りつぶされた姿をはっきりと彼に教えてくれるほどに。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(3)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（3）

「ありがとうございます」

包帯を巻いた腕を氣遣うように抱えたままで、中年の女性が頭を下げていた。

本当は人前に出ることを母に止められているけれど、最近メルはこうして、こっそり物陰から母の仕事を見るようになっていた。母は『森の賢女』と呼ばれるほど薬草や病の治し方に詳しく、その知識と人柄を慕ってここを訪れる者が多い。

今まで、母以外の人になど興味はなかった。母の言いつけを破って見知らぬ人間を観察しなくても、メルの部屋の本棚には彼の興味を惹きつけて止まないくさんの本があったし、母の気持ちを害しなくなかった。

あの月夜から、そんな気持ちが少し変化している。

物音を立てないよう部屋に戻り、メルは寝台に腰を下ろした。目を閉じると、今も鮮明に思い出せる。

彼の身体を押しつぶさんばかりに広がっていた夜空、そこに散らばる無数の宝石、硬く踏みしめた地面の感触。

そして。

「あれは、何だったんだろう」

大地と空を震わせて、静寂を無残に引き裂いて駆けていった馬車の、目指す先にそびえていた黒い黒い塔。

空を望むあの建物には、どんなものが覆い隠されていたのだろう。知りたい、と思った。

出てはいけないうつと言ひ聞かされていた、外の世界。その理由すら、メルは教えられていないのだ。

なぜ、森から出てはいけなひのか。外には何があるのか。そもそも、自分と母はどうして、森の中でひっそりと暮らしているのか。

自分は何一つ、その答えを知らずにいる。知らないままで、知ら

ないことに疑問すら持たなかった。

扉の向こうから、話し声と物音が聞こえてくる。客が帰っていくらしい。

ぼそぼそとした、母と客の女とのやりとりは小さすぎて、何を話しているのかわからない。

仕事とはいえ、母は外からの人間と会い、会話をする。しかしメルは、母以外の人と接することもできない。

禁じられて、いるから。

きゅっと、メルは服の裾を強く掴んだ。

「メル？」

ノックとほぼ同時に、母が入ってくる。

「少し時間がかかってしまったわ。ごめんなさいね」
いつもの優しい、美しい微笑み。

髪を撫でてくれる、暖かな柔らかい手。

「さあ、お茶の時間にしましょう。支度を手伝って」

母は綺麗で、いい匂いがして、そして。

「はい、母上」

その手を取って、メルは立ち上がった。

母から与えられたもので、メルを損なうものは何一つなかった。

喜びや幸福ばかりを、この人は常にもたらしてくれた。

でも。

ぼんやりと茶器を並べながら、メルの心の中から一つの像が消えることはなかった。

あの、黒々とした影の塔。

少年の紅い瞳は、刹那決意を浮かべて、閉ざされる。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(4)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（４）

散歩に行くこと自体は、怪しまれはしない。気をつけるのよ、と言われるだけだ。

「あまり遅くならないようにね」

「はい、母上」

それでも、聡明な母には自分の企みを容易に看破されてしまいそうで、メルはつい視線を逸らしてしまう。

「ねえ、メル」

だから呼び止められて、つい肩が震えた。

「……なんでしょうか」

「外の世界は、楽しい？」

続く母の言葉に、心を驚づかみにされたかと思った。

美しい母は、不思議な笑みを浮かべて少年を見つめている。

「そうね。あなたももう、こんなに大きくなったのですものね」

「母上……？」

やはり、見抜かれていたのだろうか。

今日もまた、森を出ようとしていたことを。

鼓動が早くなる。首の後ろに、汗が浮かぶ。

「いつまでも夜の森ばかりしか知らないのでは、窮屈かもしれないわね」

叱られるだろうか。森の中で遊ぶことすら、禁じられるだろうか。知らず知らず唇を引き結んでいたメルから、今度は母の方が視線を背けた。

「……引き留めてごめんなさいね」

そのままドレスの裾をさらさらと鳴らして、母は奥へ行こうとする。

「あまり、遅くなるのではありませんよ」

背の高いほっそりとした後ろ姿が、扉の向こうに消えていく。

メルは、長い長い溜息をついた。

母の様子がおかしかったのが気にならないではなかったが、やはり好奇心を抑えることはできなかった。

何日か前の記憶を辿り、夜の森を進んでいくうちに、うつそうと茂る木々の影はぼっかりと切れた。夜空の天蓋を見上げて、メルは歓声を上げる。

月の光が少し弱くなったせいなのか、前に見たときよりずっと星々がまばゆく見える。ちかちかと気まぐれに瞬きする夜の宝石を、このままずっと眺めていたいとも思った。

しかし、あまり時間がないのも事実だ。

時折星空に目をやりながら、メルは道を進んでいった。

そういえば、あの馬車はいつたいどこから来たのだろう。メルの背後は森だから、そちらでなかったのは確かだ。

注意して歩いているうち、その疑問は解ける。森を迂回するようにして、道は作られていたのだ。馬車はそこをぐるりと走り、森から道へ合流したメルの後ろから現れたように見えたに違いない。

どこから来たのか。本当にあの塔へ行ったのか、それはまだわからない。

そんなことを考えながら足を動かしているうちに、夜闇に大きな影が浮き彫りになる。

あの塔だ。

もつと遠いかもしれないと思っていたから、メルは安堵して微笑んだ。これならば、母を心配させることなく戻ることも難しくない。塔は、高い塀に囲まれていた。尖った柵がメルを威嚇するように天を指し、入り口は見当たらない。

メルは少し考えて、鉄柵によじ登った。

少年の身体が軽かったことが、幸いしたのだ。

程なく彼は、とげとげしい鉄の威嚇を乗り越えて、その向こうの

柔らかな草の上に飛び降りた。誰かが来る気配はない。そもそも、人が本当にいるのかも怪しい。静かすぎる。

森の中だつて、こんなに無音でいることはほとんどないものだ。辺りを見回しながら、メルは建物に近づいた。四角い窓の向こうは真っ暗で、やはり誰も住んでいないのではなかったのだから。

あの馬車は、ここを目指したのではなかったのだろうか。そもそも、ここはいったい何なのだろう。

建物の壁を辿り、やがて縁に至る。何気なくそこを曲がろうとして、彼ははっと頭上を見上げた。

橙色。

本当に微かで、見間違いかもしれないと思えるほどにあえかだつたけれど、彼はそこに目を凝らした。

窓があつた。小さなそこを見つめているうちに、また変化が起きる。

暖かな橙色が、ちらりとまたよぎつたのだ。

メルは、素早く周囲を探した。壁は石でできていて、問題の窓は二階にあつた。

何かないだろうか。何か。

「あれだ」

壁を伝う、蛇のようにしなやかな鳶が目に入った。駆け寄って何度か引つ張つてみたが、かなり丈夫そうだ。もっと上まで伸びているのかもしれない。

メルは夢中で、鳶に捕まって壁を昇った。ほんの僅かなくぼみに手と足をかけ、身軽な少年の身体は無茶なことを実現させる。

やはりちらちらと明かりの動く窓の縁に、彼は足をかけた。花の鉢を置いたためなのか、狭い露台がついていたのが幸いした。

両足を乗せて、鳶に捕まって膝を移動させる。月の光が、後ろから差し込んでいた。

中が、見えた。

寝台と机と、そんなものしか置かれていない狭い部屋だった。中央には椅子が置かれていて、何かがそこにいる。

いや、『誰か』だ。

金色の髪を高い位置で結い上げて、小さな顔は真っ直ぐメルの方に向けられていた。零れんばかりに見開かれた瞳が青い色であること、纏ったドレスの白さがより可憐さを引き立てている。

ふつくと下唇が震えているのは、悲鳴を上げかけているからか。今人を呼ばれたら大変なことになるのに、メルは動くことすらできずにいた。

目が見えるようになってから、いろいろなものを彼は脳裏に焼き付けてきた。

朝焼けの薔薇色、夕暮れのすみれ色、夜空の宝石、そして母の笑顔。

森の夜露。

けれどそのすべてが色あせてしまうほどに、彼は目の前の光景に魅了されていた。

窓の向こうの少女は、本当に美しく、綺麗だったのだ。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(5)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（5）

朝食が進まないことを、母が気づいて不思議そうな視線を向けてきた。

メルは慌てて匙を取り上げたが、食欲よりも昨夜の光景が彼を支配している。

夜の中でもなお、明るく輝くようだった金色の髪。あどけない青い瞳は、昨日は驚きと怯えだけでいっぱいになっていた。

それを、惜しいと思った。

けれどそれよりもなによりも、あの子の彼がしなければならなかったのは、赤く小さな唇から悲鳴が迸る前に逃げ出すことだったのだ。

「メル、どうしたの？ お腹が痛いのか？」

やはり思うように食事のはかどらない彼に、とうとう母は声をかけてきた。

これ以上一緒にいたら、きっと昨夜のことを感づかれてしまう。

メルは嘘が苦手だ。相手が母ならば、なおさらのこと。

「大丈夫です。もう勉強してきます」

「無理しなくてもいいのよ？ 具合が悪いなら……」

「ううん、そうじゃないんです。心配しないで」

半分以上残してしまった食事を、急ぎながらもきちんと洗い場で片付けてから、メルは逃げるようにして母の視線から離れた。

自分は、とても悪いことをしているのかもしれない。母に隠し事をするなんて、今までなかったことだ。

母の仕事をのぞいたり、森を黙って出てみたり、最近自分は、母に逆らってばかりだ。

何よりも。

外の人間に会ってはいけなさと、言われていたのに。

メルはそっと目を閉じた。二つの青い宝石が、真っ先に浮かんで

くる。

同じくらいの年頃のようにだった。白いドレスがよく似合っていて、かわいらしくて。

彼女は、どんな風に笑うのだろう。どんな声で、話すのだろう。

——知りたい。

三度目の冒険は、今までよりずっとうまくいった。

母が見送りに来るのを待たずに家を出て、森を駆ける。月はどんなやせ細っていて、今夜はほとんど足下が見えない。何度も転びそうになった。

それでも何とか、見慣れた道に辿り着く。

息が切れて干上がった喉が痛かったが、メルは走るのをやめなかった。

あの少女に。

もう一目でもいい、あの少女に。

なぜこんな気持ちになるのかわからない。あの窓をのぞけば、今度こそ本当に少女を怖がらせて、捕まってしまうかもしれない。

でも。

それでもいいと、思う心がある。

塔の影は、夜に溶けている。月の光を失いかけて、暗闇の中では存在を主張できずにいる。

ひやりと冷たい石の壁と、しなやかにうねる鳶を頼りにして、メルは窓を目指した。

風が吹く。身体が傾きそうになる。腹の辺りが恐怖で凍ったが、それに負けて手を放すことはもつと致命的だ。

自分にそう言い聞かせて、歯を食いしばる。やがて辿り着いた窓辺に膝をついたとき、メルは安堵のあまり気を失うかと思った。

がくがくと震える自分自身を叱咤して、窓の向こうに目を凝らす。そこで初めて気がついて、メルは息を呑んだ。

暗い。あのときと違って、明かりがついていない。
何も見えない。

じわじわと、心がいやな色に染まって下へ下へと落ちていく。
あの少女は、いないのか。

怖がらせてしまったから、家人に言って部屋を変えてもらったの
かもしれない。そもそも、そういった可能性を真っ先に考えつかな
ければならなかったのだ。

もう、会えないのかもしれない。

降りなければ、帰らなければと頭のどこかは主張していたけれど、
そんな力もなくなつてメルはぼんやりと透明の壁に遮られた闇の向
こうを見つめ続けた。

かた、という小さな音を耳が捕らえたのは、そのときだ。

惚けていた心が、突然はつきりと震える。誰かいるのか。メルを
待ち伏せて、捕まえようとしていたのか。

窓に押し当てた掌に、汗が滲んだ。

逃げなければ。けれど、こんな状態ではすぐには動けない。間に
合わない。

焦る目の前が、不意に違う色に染め上げられる。

咄嗟に何が起きたのか理解できず、メルはぎゅっと目をつぶった。
この、色は。

何だ。

「あの……」

小さな小さな。

母よりもずっと高くで、ずっと子供のようで。

耳に飛び込んできて奥底で揺れるそんな音が人の声だと、気づい
たメルはゆっくりと瞼を上げた。

視界を満たしていた色と、その意味もようやく明らかになる。

「ごめんなさい……」

橙色。

小さな燭台を手にして、不安そうに佇む細い人影。

「あなたは、だあれ？」

前に見たときと同じように金の髪を結び上げて、少女は首をかしげていた。

白い頬の柔らかさ、唇の可憐さにメルは名乗ることも忘れて目を奪われた。

やはり、とても綺麗だ。

こんな声で、この娘は話すのか。

こみ上げてくる温かな気持ちをかみしめながら、メルは少女の瞳を覗き込む。

そこに今は恐怖も驚愕も浮かんではないことを認め、彼はゆっくりと微笑んだ。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(6)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（6）

少女は、窓を開けてくれた。音を立てないよう気をつけて、メルはそっと部屋の中に降りる。

「……怖くなかったの？」

「え？」

問われ、メルは首をかしげた。

「こんなに、高いところに登ってきて」

「ああ」

普段森で木登りもよくしていたから、あまり抵抗はなかった。登るのに苦労したのは事実だが。

「平気だよ。もっと高い木に登ったこともあるよ」

「木に、登る？」

今度は、少女が不思議そうに瞬きした。あどけない様子が愛らしくて、メルはまた微笑んでしまう。

「木登り、したことないの？」

「ないわ」

メルは、つくづくと少女を眺めた。確かに、こんなに小さくて細い少女では、そんな遊びとは縁遠いかもしれない。それに着ているのがドレスでは、枝に裂かれてぼろぼろになってしまう。

「お外に出てはいけなくて、言われているから」

そんなことを考えていたメルは、続いた少女の言葉にはっと胸を突かれた。

「出てはいけなくて？ 誰に言われてるの？」

「お母様」

鼓動が、飛び跳ねた。

「……どうして？」

——森の外へ出てはいけない。

——人に会っては、いけない。

「どうして、駄目なの？」

母の顔が、思い浮かんだ。

「わからない」

少女は、ふるふると首を横に振った。金の髪が闇に舞い、光を散らす。

「でも、出たら怒られるの。窓から外を見ることができないわ」
金の帳がさらさらと流れ、うつむいた少女の顔を隠してしまう。
メルはじっと、その様子を見つめていた。

——いつまでも夜の森ばかりしか知らないのでは、窮屈かもしれないわね——

微笑み。優しい手。温もり。

『母』というのは、そんな存在なのだと思っていた。

いつだってそばにいて、守り包んでくれるような、この世界で最高に善いものだと思っていた。

違うのだろうか。この少女にとっての『母』は。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(7)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（7）

「いけない」

はつとしたように、少女が唇を押さえた。どうしたのだろうと思しながら見守るメルの前で、彼女は少し後ろに下がリドレスをつまんでちょこんと会釈した。

「初めまして。ご挨拶が遅れました」

ただたどしい、いかにも丸暗記している言葉を必死に思い出している口調だった。

「わたくし、ヴェッティン家のエリーザベトと申します。以後お見知りおきを。若様」

懸命な様を健気と思いつつも、だからメルは、つい笑ってしまったのだ。」

「……何で笑うの？」

あからさまに怒鳴ることはしなかったが、少女はむくれて頬を膨らませる。メルは慌てて喉の奥におかしさの発作を引っ込めた。

「ごめんね」

決して、馬鹿にしたつもりではなかったのだ。

「一生懸命で、かわいかったから」

それが本当に、素直な気持ちだった。

「……かわいい？」

「うん」

うなずいて、彼はもう一度少女を視界のすべてに収めた。

小さくてほっそりして、彼の様子を窺うように瞬き一つせずじつと見返してくる青い瞳。無防備であどけなくて、手をさしのべたくなる。

エリーザベトは、微かに笑みを見せた。機嫌は直してくれたらしい。

「それで、あなたは？」

「え？」

「まだお名前訊いてないわ」

指摘されて、ようやくメルも思い至る。それでエリーザベトが自分から名乗ってくれたのかと、合点もいった。

母にも教えられた。誰かに名前を尋ねるなら、自分から名乗らなければいけないと。

その際の作法も、身につけさせられた。

「お初にお目にかかります」

片足を後ろに引いて、片手を胸に当てて、一礼する。

「メルヒエン・フォン・ルードヴィングと申します。以後よしなに、姫君」

そうして見上げた先のエリーザベトは。

小さく首をかしげて、はにかんでいて。

小鳥のようだ、とメルは思った。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(8)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（8）

森の中しか知らずに育ったメルですら驚くほどに、エリーザベトは外に関して無知だった。

生まれてから一度も、外へ出たことがないのだという。四角く切り取られた空が、彼女の世界のすべてだった。

「これが、『くさ』？」

メルは靴に張り付いていた草を、エリーザベトは恐る恐るつまみ上げてしげしげと見つめる。

「柔らかい……それに、匂いがするわ」

「そつだよ。夏にはもっと強い匂いがする」

「ほんと？」

ただの草の破片を大事そうに掌にのせて、エリーザベトは笑う。

夏の草の香りを少しでも感じようとしてか、そつと小さな鼻先を近づけたりもしている。

胸が、締め付けられた。

メルが初めて一人で木登りができるようになったときや、夜の森で一人気ままに遊んでいたときに、いったい彼女は どうして 過ごしていたのだろう。

初めて互いに名乗り合ったあの夜から数日経っていたが、毎日こへ来られたわけではない。メルが訪れない日は、何をして朝と夜を巡っているのだろう。

「メル」

その答えを、メルはもうわかつている気がした。

「また、遊びに来てくれる？」

夜明けの光が射す前、別れ際に必ずエリーザベトはしっかりとメルの服を掴む。

「絶対、絶対また来てね？」

青い双眸を不安でいっぱいにして、唇をわななかせて。

もしもメルが『否』と答えようものなら、きっとこの綺麗な青は涙で溶けてしまふに違いなかった。

そんな光景は見たくないから、メルはいつも少女の手をしっかりと握り、揺れる宝石を間近で見つめ返す。

「ああ、約束するよ」

あんな草の切れ端ですら、少女には喜びなのだ。

今夜は母と話していて遅くなってしまい、メルはやむなく塔へ行くのを断念せざるを得なかった。せめて明日、何か持っていてやるうと思ひ立ち、彼は森を歩いている。

母はうすうす感づいているに違いない。それでも面と向かって問いただそうとしないのは、メルを信じてくれているからなのか。

だとしたら、少し心苦しい。

けれど、そうかといって塔へ行くのを禁じられたらと考えると、胸が痛む。

きつとエリーザベトは泣いてしまふ。誰とも会えず誰とも話せない日々が、あの青い目を悲しみと寂しさでいっぱいにしてしまふ。

初めての友達だ、そんな風にさせたくない。

はた、とメルは足を止める。

今宵はとも月が明るい。だから、その光景は惜しげもなく彼の前に照らし出されていた。

どんな偶然があつたのか、深い森の奥のはずなのにここだけぽっかりと開けていた。葉の天蓋に邪魔されず、夜空が美しい星々をメルの頭上にちりばめている。

しかしそれよりも何よりも、彼の目を奪ったのは大地に溢れる奇跡だった。

呼吸すら止めて、メルは立ち尽くした。

いつか宝石のようだと思った夜露が、無数に足下にきらめいている。それだけでも胸がときどきして泣き出しそうになるのに、それ

らに縁取られてもう一つ、別の可憐さが夜の中にそっと存在していた。

白い、花。

太陽がとつくに姿を消して、生き物は眠るばかりの時だというのに、闇に負けず純白を広げて懸命に咲いている。

苦しくなつて、ようやくメルは息を吐き出した。

まだ、ときどきしている。

空を見上げてみる。月はまだ、完全に円くはなっていない。

明日は、晴れるだろうか。

雨など降らず、母にも止められることがなかったら、そのときはゆっくりと微笑んで、彼は再び夜の花園に視線を戻した。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(9)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（9）

膝の上に何かを抱いて、エリーザベトは椅子に座っている。何か考え事をしているのか、横顔がどこかぼんやりしている様子だった。

「エリーザベト」

軽く窓を叩いて呼ぶと、劇的に変化する。頬に赤みが差し、満面に笑みを浮かべて窓に駆け寄ってきて小さな指先が窓の掛けがねを外した。

「メル！」

「こんばんは」

彼が床に降りるのを待つて、少女の身体が寄り添ってくる。彼女はいつも甘くていい匂いがして、それを感じる度メルはくすぐったい気持ちになる。

「待つてたわ。嬉しい」

一夜あけてしまった分を埋め合わせるかのように、エリーザベトはメルからなかなか離れようとしなかった。触れあった箇所から染み入ってくる温もりが、少しずつ強く感じられるようになる。

跳ねる鼓動の強さと速さは、どちらのものだろう。

目に見えず形もないのに確かに存在するそれを、包み込みたいと思う。

決して放さずに、大切に。

「昨日は、来られなくてごめんね」

「ううん。今日来てくれたから、いいわ」

僅かに低い位置から、エリーザベトがにっこり笑う。薄闇にぱつと光がともったように思えて、メルは小さく溜息をついた。

ほと、と何かが床を打ったのはそれと同時だった。

「あ、いけない」

不意にエリーザベトはかがみ込み、何かを拾い上げた。少女の動きを目で追って、メルは彼女の腕に収まるそれに気づいた。

「人形？」

少し古びた、エリーザベトの手に収まるほどの小さな人形だった。髪の色は黄色の糸、肌やドレスは白い布。

そして、顔にはめ込まれた二つの目は、青の石。

「昔、お母様が作ってくださったの。私のお友達につて」

微かにはにかんで、エリーザベトはメルにも見えるように人形を持ち直した。

「今までずっと、この子が一緒にいてくれたのよ」

人形をしっかりと抱きしめて、少女は微笑む。

メルは胸は、その分だけ痛みを増す。

彼女とともに在ったのは、ずっとこの物言わぬ人形だけだったのだろうか。

言葉をかけても決して返事をしない、動かぬ友達だけを頼りにしてきたのだろうか。

「だからね、メル」

彼の想いには気づかず、少女は青い目を上げる。
真っ直ぐに。

「新しくできたお友達を、この子にも会わせてあげたかったの」
仲良くしてね、と、メルの方に人形が差し出される。

目の前の少女とよく似た姿の、小さく愛らしい存在。

「……よろしくね」

人形を撫でると、エリーザベトはとても嬉しそうに頬をほころばせた。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(10)(前書き)

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（10）

木登りはおろか、今まで一度も外へ出たことのない少女連れ出すのは至難の業だ。

メルですら、鳶と石壁のくぼみを頼りに窓を上り下りするのはかなり怖いのだ。エリーザベトにそんな芸当をさせるのは最初から無理だとわかっていた。

朝食を済ませてから、メルはずっとどうやって彼女をあの手から外へ連れ出そうか考えていた。入り口の扉が使えば一番いいのだが、あれは開けるときに大きく軋むし一階には常に誰かがいるから駄目だとエリーザベトは言う。

「うーん……」

家にあるいろいろな本を無作為にめくりながら、メルは唸った。何かいい方法がどこかに書いていないかと探しているのだが、残念なことには文字でいっぱいに埋まった頁は沈黙したままだ。

首の後ろに、疲労が重く溜まっている。メルは手にしていた本を閉じ、本棚に戻した。

少し休んだ方がいいかもしれない。

渦を巻く階段を下りて、一階に着くやいなや母の声がした。

「メル、ちよつと水を汲んできてくれない？」

半身を廊下にのぞかせた母の姿と一緒に、温かい匂いがメルの鼻孔をくすぐった。もう昼の時間になっていたらしい。

「はい、母上」

手桶を受け取り、メルは表に出た。彼らの住んでいるのは古い教会で、出入り口の正面には井戸もあるのだが、すっかり枯れてしまつて使い物にならない。水を汲むためには少し先の小川まで行く必要があつた。

昼の森は日の光にすべてをさらけ出されて、夜の無遠慮な奔放さを失っている。風に揺さぶられるたびさらさらと陽を照り返す葉の

緑は美しいけれど、闇にざわめくそれらを幾度となく目にしてきたメルにはどこかよそよそしく遠慮深く映った。

恐れているのかもしれない。こんなにも明るい世界に、自分のすべてが照らし出されてしまうことを。

小川まで辿り着き、メルはぼんやりしながら水を汲んだ。両腕と肩に重さがかかってきて、体勢を崩さないよう気をつけながら歩く。今よりもっと小さな頃は、桶の中で暴れる水に負けて取り落としたり転んでこぼしてしまったりしたことが何度もあった。

最近はそのようなことはないけれど、汲み直して来なければならないときの悔しさとやるせなさではできれば味わいたくはない。

「あつ！」

けれど今日は、考え事をしていたのが徒となった。

小石か木の根か、いずれにしても何者かがメルの足を引っかけた。咄嗟に踏み出したもう片方の足は、しかし間に合わず。

鈍い音を立てて、桶は透明な膜を一瞬虚空に広げて土の上に転がった。

「ああ……！」

呻きが漏れる。ぐつしより湿った地面と空しくぽかんと口を開ける桶を見比べて、メルは仕方なくそれを拾い上げた。

小川からそれほど離れていなかったのが不幸中の幸いか。

無造作に桶をぶら下げて、メルは踵を返した。少し靴下にも水がかかってしまっていて、歩く度脛が冷たい。

考え事も中断されてしまった。気持ちばかりが急いて、やるせなさ溜息となつて唇から滑り落ちる。

一日でも早く、月が明るいうちにあの花畑をエリーザベトに見せたいのに。

「井戸が使えたらなあ……」

せっかく家の目の前にあるのに、使い物にならないあの古井戸すら恨めしい。だが仮に水が十分あったとしても、釣瓶もすっかり壊れているからまずそこを直さなければ使えないのは変わらないが。

「あ」

足が止まる。木々の葉擦れと、小川のせせらぎだけがしばしその場を支配する。

井戸。釣瓶。

「そうだ！」

飛び出した叫びに驚いたのか、ざざつと辺りの枝が鳴り一斉に鳥が飛び立つ気配があつた。一瞬だけ森の静寂を切り抜いた少年の叫びは、すぐにまた森に吸い込まれていく。

しかし少年はすでに、突然降って湧いたひらめきにだけ夢中になっていた。

「井戸、釣瓶！ そうだ！」

もどかしく水の中に桶を突っ込み、量も確認せず彼は家路を急ぐ。乱暴に運ばれて桶から水がひっきりなしに跳ねたがかまわない。

この方法なら、きつとうまくいく。四角く切り取られた世界しか知らないあの少女に、もっともつと広い世界を見せてあげられる。胸がどきどきした。紅潮する頬の理由がただ興奮のためだけだったのか、彼はまだ知らなかった。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（11）（前書き）

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（11）

その夜、メルは縄を肩にかけてエリーザベトのいる塔へ向かった。切れてしまわないかは昼のうちに確かめておいたし、“本番”に向けて練習もした。きつとうまくいくはずだ。

「うわっ！」

ぼんやりしていると、足を取られてよろめいた。すんでのところで転ぶのは避け、メルは溜息をつく。

手にした桶には、小石がいっぱい入っている。いつも汲んでいる水よりも少しだけ重い。歩きながら集めてきたものだ。

この石と縄が、きつとエリーザベトのために役に立ってくれる。そう考えると、胸の奥が不思議な喜びで満たされた。

彼女の笑った顔を見たいと思う。彼女のために、喜ぶことをしたいと思う。

会えない日も、何をしているときでも、あの愛らしい少女の姿が心に浮かぶのだ。

「メル、こんばんは」

いつものように、窓辺でエリーザベトが待っていた。挨拶を返すのももどかしく、メルは縄を下ろして先端を彼女の方に差し出す。

「なあに？」

エリーザベトは、きょとんと瞬きして首をかしげた。

そんな少女の手を、メルはしっかりと握った。

温かい。柔らかくて、小さい。

「外へ連れて行ってあげる」

空は本当は、四角く切り取られてなどいないのだと。

大地は、果てがなくどこまでも広がっているのだと。教えてあげたい。

「僕を信じてくれる？」

青い瞳の零れんばかりに大きく瞳られる様を、メルは真っ直ぐに見つめて返事を待った。

ふつくらとした少女の唇が、何か言いたげにほんのり開かれたかと思うとすぐに閉じられる。視線が逸らされ、迷うように動くのに、つられて金の髪がふわふわと踊っていた。

駄目なのだろうか。

やはり、怖いのだろうか。

「メル……」

鼓動が、跳ねた。

エリーザベトの手が、おずおずと彼のそれに重ねられる。

ふんわりと、柔らかくて。

母とは違う温もり。

息を吸い込むと、心なしか甘い香りが胸を満たすようだ。

「私、信じる」

たゆとっていた青い眼差しが、少しずつ少しずつ強い意志を帯び始める。

「メルのこと、信じる」

薄紅の唇を、きゅっと引き結んで。

彼女ははっきりと、うなずいた。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（12）（前書き）

> i 3 3 1 1 4 — 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ（１２）

エリーザベトの身体にしっかりと縄を巻き付ける。あまりきつく縛っては苦しいだろうと思いつつ、ある程度固定しなければ逆に危険だ。

注意深く、メルは少女を窺いながら縄を調整した。

「痛くない？」

「うん」

メルを信じると言ってくれた少女は、尋ねる度にこくりとうなずく。本当は痛くても苦しくても、彼女は耐えて同じように答えるのだろうという気がした。

最後にもう一度結び目を確かめて、メルは立ち上がった。白いドレスに巻き付く薄汚れた縄が今更ながらに申し訳なくなり、エリーザベトを直視できない。

「メル？」

「……ちよつと待ってて」

早く終わらせなければ。

誰かがこの部屋まで来るようなことがあればやつかいだし、何よりエリーザベトを長くこんな状態にしていたくない。

窓から下の様子を確かめ、メルは縄の端を持って素早く地面へ降りた。その際に、縄を枝に引っかけることも忘れない。

木の根元には、石でいっぱい満たした桶が用意してある。

先日水汲みに行ったとき、井戸と釣瓶の連想から思いついたのだ。家にあつた本で、井戸の原理も調べた。

重さが均等であれば、縄の両端にぶら下がったものは上がりも下がりもしない。天秤と同じなのだ。どちらかを上か下に移動させた場合、重さに差をつければいい。

石を入れた桶がエリーザベトより軽いのは当然だが、メルの狙いは彼女を安全にあの部屋から下ろすことだ。下降の速さが緩くなれ

ばそれでいい。

もちろん、バケツとエリーザベトの重さに差がありすぎた場合の対処も考えてある。幸いこの塔の周囲には大きな石がごろごろしていて、微調整には困らない。

けれどまずは、確かめなければ。

「エリーザベト」

もう一度塔の上に戻って、メルはおとなしく待っていた少女に駆け寄った。そして。

「きゃっ！」

少女が驚いて小さく声を上げる。メルもつられてびくつと腕が震え、危うく抱き上げた彼女を落としそうになった。

「声、だしちゃ駄目だよ」

「……ごめんなさい」

ひそひそと囁きながら、メルは腕にかかる彼女の重さを確かめた。軽い。

思っていたよりずっと。

そして。

鼻孔と胸の内をくすぐるこの甘い匂いは、いったい何だろう。

小さい頃母親に抱かれた記憶がふと蘇ったが、全身が感じる現実はそのよりもずっと温かで柔らかで。

放したくない、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6069x/>

marchen【Sound Horizonより】

2011年11月11日03時13分発行